【公表の参考様式（管理機関用）】　　別添２

令和７年７月 17 日

令和６年度　特別の教育課程の実施状況等について

愛媛県		
学　校　名	管理機関名	設置者の別
鬼北町立日吉中学校（外１校）	鬼北町教育委員会	公立

１．学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学　校　名	特別の教育課程の編成の方針等の公表 URL
鬼北町立日吉小学校	https://kihoku-hiyoshi-e.esnet.ed.jp/file/13021
鬼北町立日吉中学校	https://kihoku-hiyoshi-j.esnet.ed.jp/file/15427

２．学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学　校　名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
鬼北町立日吉小学校	https://kihoku-hiyoshi-e.esnet.ed.jp/evaluatingschool	https://kihoku-hiyoshi-e.esnet.ed.jp/evaluatingschool
鬼北町立日吉中学校	https://kihoku-hiyoshi-j.esnet.ed.jp/file/14570	https://kihoku-hiyoshi-j.esnet.ed.jp/file/14570

３．特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

（１）特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

（○）・計画通り実施できている

・一部、計画通り実施できていない

・ほとんど計画通り実施できていない

（２）実施状況に関する特記事項

※（１）で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

（３）保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

（○）・実施している

・実施していない

＜特記事項＞

１年に４回、学校運営協議会を開催し、地域住民・保護者・教職員の中から教育委員会から任命された委員が会合する。その場で、教育課程について説明し、「郷土学」を充実させるための意見や協力を得られるよう努める。

３．　実施の効果及び課題

（１）特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

本特例は、義務教育９年間を連続した期間と捉え、発達段階に応じた一貫性のある指導を行うとともに、教職員や児童生徒が連携・交流を深めることにより、小学校と中学校が一体となって子供たちを育てるものである。実際、本特例を実施している日吉小学校においては、乗り入れ授業やＩＣＴ の活用で、教員の専門性を生かした授業を行うことで学力の向上を目指している。また、小中合同行事を実施し交流の場をつくり、効果的な交流を行うことができている。

平成 25 年度から、小・中学校ともに「地域とともにある小中一貫教育」を推進し、特別の教育課程「郷土学」を実施している。「郷土の歴史や文化、産業、生活、自然など、地域素材をもととした体験活動を通して、地域社会の形成者としての資質・能力の育成」を目指している。

「郷土学」において、体験活動や地域の方との交流を通して、５・６年「郷土の歴史に学ぶ」においては新たな先人（人材）を発掘し、中学校でそれを広げることができた。中学校では 11 月に「一人一研究発表会」を、小学校では２月に「郷土学発表会」を、保護者や地域の方を招いて行うことができた。実践に対しては、学校外からも「発達段階に応じた取組ができ、児童生徒の成長が感じられる」といった声をいただいている。教職員・保護者・地域学校関係者評価委員等を対象にした学校評価においても、前期後期ともに、「９年間を見通した系統的なカリキュラムの郷土学」の項目がＡ（達成率 80%以上）と毎年高評価を得ている。児童生徒は、地域住民の願いや思いに触れて感謝の気持ちを強くするとともに、地域住民の一員としての自覚も芽生えたようである。地域の教育力を得ることによって、児童生徒が豊かに育つことを実感することができた。

一方、課題としては、学力には個人差があるので、個別学習に力を入れたり、家庭学習や読書活動の充実を図ったりすることを課題として取り組んでいる。また、「郷土学」の特性である対話やコミュニケーション、人との関わりを重視し、小中合同研修会では、児童生徒の表現力育成のため、一貫した教育実践を目指し、取り組んでいる。

（２）学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

「地域とともにある学校」を目指し、小学校は「元気・根気・やる気と思いやりがあり、郷土を誇りに思う児童の育成」を、中学校は「豊かな人間性を育み、自己や郷土に自信と誇りをもつ生徒の育成」を学校の教育目標に掲げ、児童生徒一人一人が自己や郷土に自信と誇りを持てる教育を学校経営の基本方針の一つとしている。中学校では、「郷土学」により、郷土に誇りを持ち、積極的に関わっていこうとする生徒の育成に努めて

いる。「一人一研究発表会」では、「充実した内容で、生徒の自己表現もできている」と地域の方から称賛いただいた。小学校についても、地域の様々なマイスターと触れ合ったり、日吉地区以外の史跡を訪れて学ぶことで、更に、郷土に誇りを持ち、積極的に関わっていこうとする児童生徒が育っていることがうかがえる。そして、「郷土学発表会」でも、「児童の生き生きとした表情や伝え方の工夫がよい」と地域の方から称賛いただいた。

一方、多くの学びが発表（発信）される機会が、年に一度しかなく、参観者も校区内と限定されており、来校いただく方は限られている。調べてまとめたことが校区内で終結することなく、広く伝えていくことが課題である。

４．課題の改善のための取組の方向性

３に示すような課題を踏まえて、二つの改善に取り組む。

一つ目は、「郷土学」の学習内容や学習方法の見直しを行う。そのために、地域学校協働活動推進員（地域コーディネーター）と連携し、創意工夫ある授業や新たな人材・素材等の開発に努めたい。そして、これまでとは見方・考え方を変えた取組にチャレンジする。

二つ目は、年に１回の発表会に限らず、調べてまとめたこと等を近隣の学校へ発信する機会を再度設ける。また、有効な発信ができるよう、小・中学校が連携して、日頃から表現力の育成に努める。発表の際、ＩＣＴ機器を活用し、オンライン交流も試みる。自身の学びをアウトプットし、また、相手の学びをインプットすることで、郷土の新たな良さを気付き、将来にわたって郷土を誇りに思う心を育てたい。